

山梨大医学部の中尾篤人教授(免疫学)らの研究チームが、24時間周期で睡眠や覚醒のリズムを生み出す「体内時計」を操作することで、花粉症などのアレルギー症状を抑制する新しい治療法を人の細胞を使って実証した、と発表した。製薬会社と新薬開発に着手している、花粉症の治療法を一変させる可能性があるという。

中尾教授らはこれまでに、花粉症の症状が明け方に重くなる「モーニングア

花粉症に新治療法 「体内時計」を操作

山梨大・中尾教授が実証

タック」の仕組みを研究。アレルギー反応を引き起こす免疫細胞が、自らの持つ時計遺伝子によって一日の活動時間を調整していることを突き止めている。

今回、この特性に着目し、スギ花粉症の患者とマウスの体内時計をつかさどる細胞にそれぞれ化合物を投与して、時間を調整する酵素の働きを抑制。細胞の時間を夜から昼に変え

新薬開発に着手

たところ、アレルギー反応を弱めることができた。投与量によって、昼とほぼ同等まで症状が抑えられるという。

一方、米国の製薬会社が体内時計を利用した睡眠障害や鬱症状に対する新薬開発に取り組んでおり、作用する箇所をアレルギー症状が出やすい鼻や目などの細胞に限定することでアレルギー薬に転用できる可能

性があるという。チームは同社と共同研究を進めている。

中尾教授は「抗ヒスタミン剤やステロイド点鼻薬などで症状を緩和させるこれまでの治療法とはまったく異なる発想の治療薬開発が期待できる」としている。

研究成果は、アレルギー研究分野で世界的な権威がある米国アレルギー臨床免疫学会誌の電子版に掲載された。

〈古守彩〉